KOYAN Creative Works

成人向け
R18
ADULT ONLY

スレイブスーツ

SLAVE OF SUITS

初めて自分専用の装備を与えられたソフィアは困惑していた。
ゴムのような素材でできたスーツが第二の皮膚のように、素肌にぴったりと張り付く。内側は専用のジェルがびっしりと塗布されており、タイトなスーツに体が飲み込まれるように入ってしまう。通気性が全くないスーツは、内側でジェルや汗を外に一切漏らさない。粘液ごと体が閉じ込められているかのようで、動く度にスーツに全身を舐め上げられる。さらにグチャグチャ…といった水音も相まって、気持ち悪いその感覚は、徐々に性的な快感に変わりはじめていた。
なんとか落ち着こうと深呼吸をしてみる。

（シュコーーーー）

ガラスの球体…金魚鉢をひっくり返したような形のヘルメットの中は、密閉され背負った機械に

エアーコントロールされている。外の空気から隔絶され、呼吸をする度にバックパックから与えられる空気しか吸うことができない。しかも、呼吸する度に「シュコー」と機械的な音が漏れてしまう。
ソフィアはガラスに映った自分の姿を見ると、ヘルメットの中で赤面してしまう。
「このスーツ…は、恥ずかしいよぉ…」
股間の割れ目や胸の乳首もくっきり分かるほどに、体のラインが出ている。さらにスーツの光沢で裸でいるよりも艶かしい姿を呈している。必要な装備とはいえ、あまりにも卑猥な姿だ。自分以外も招集されているという話も聞いていたが、こんな装備をみんな装着しているなんてにわかに信じがたい…。

しかし、戸惑っている時間はない。ソフィアは現実逃避するようにヘルメットの上からゴーグルを装着する。次に向かうべき部屋と施設内のマップが、シールドの向こうの景色にＡＲ機能で合成表示される。
卑猥な装備で指示される通りに通路を進む。相変わらずスーツはグチャグチャという音と、呼吸する音を消すことができず、通路にその音が響いていた。
「おかしいわ。ここのはずなのに…」（シュコー）
指示された通りに通路を進んでいたはずなのに、道に迷い同じところをグルグル周回してしまっていたようだ。

このスーツは施設内の扉やゲートを通過する際、セキュリティパスとしての機能を果たす。装着者の生体情報があらかじめバックパックのコンピュータにインストールされ、体にピッタリあうようにカスタムされて支給される。
ゲートを通過する際は、スーツそのものが装着している人間の体を3Dスキャンして、本人であるか認証【アクティベーション】される。
そのため施設の中では、常にスーツを常に装着していなければならない。
シュコー
シュコー
プルン
プルン
ゲチャ
ゲチャ

とくにソフィアのような新人は、スーツ内でDNAチェックも行われる。スーツを装着する前に女性器にタンポンのようなデバイスを、ジェルと共に挿入する。バックパックのコンピュータがワイヤレスでそのデバイスにアクセスして、膣内の体液を回収、解析して、DNAチェックが行われる仕組みになっている。

「はぁはぁ…このスーツ着ていると…なんか変な気分になっちゃう。ぐちゃぐちゃして気持ち悪いはずなのに…らめぇ…なんか気持ち良くなっちゃう。」

ソフィアは体のラインを晒し上げるスーツと性器に挿入しているデバイスで、欲情を隠しきれずにいた。胸はブラのように支えるものがなく、歩く振動で黒いスーツに包まれた胸がいちいち揺れる。胸全体をねっとり舐められるような気持ちよさがたまらない。さらに膣内に挿入しているデバイスが股間の疼きを否応なく意識させる。スーツの股間の部分はジェル以外の体液でさらにドロドロになっていた。

「はぁはぁ…だめぇ…えっちなことしたい…したいよぉ…」

ヘルメットの中で赤面しながら呼吸を荒くするソフィア。シュコーシュコーとバックパックから激しく呼吸音が漏れる。そして、黒いラバー状の極薄スーツに包まれた体がクネクネと淫らに動いてしまう。しかし、いつ誰が来るかわからないこんなところで欲情を爆発させるわけにはいかない。そして、目の前には通過すべきゲートがある。何度か行ったり来たりして迷ったが、間違いないことを彼女は確認した。

「ゲートアクティベーション開始」

ゲートのボタンを押して、ヘルメットの中で音声コマンドを入力するとアクティベーションが開始される。スーツの鼠蹊部にはチップが埋め込まれていて、ゲートの床に埋め込まれた特殊カメラがこれが読み込む。

そして、ゴボゴボと音を立ててバックパックがスーツをバキュームする。ソフィアの身体をくまなく包んでいたスーツは、その体を圧縮するようにぎっちりと締め上げる。ギチギチギチという音を立てて、全身をきつく抱きしめられるような圧迫と、ドロドロの粘液で全身を舌で舐められているような快感が彼女を襲う。

「あっ…あああっ…あああああっ!!」

ヘルメットの中で喘ぎ声が堪えきれず、溢れてしまう。彼女の声はそのままヘルメットの中に装備されているマイクが捉え、外部スピーカーが隔絶された外の空気にもらしてしまう。

スーツを装着してからずっとソフィアが欲していた性的快感。それを絞り出すかのように、彼女の体は身動きできないほど縛られ圧縮される。そして、膣内に挿入していたデバイスが振動して溢れる蜜を回収する。スーツの中に密閉され、性的快感にさらされているのが、他ならないソフィアであることをバックパックが解析して、認識する。

だがしかし、それは数十秒の出来事。解析が完了するとそれは停止して、求めていた快感は一瞬のうちに取り上げられる。最後までシてくれない意地悪さに悶々とする。

「アクティベーション方式が異なります。ロックを解除できません。管理者に確認をしてください。」

ヘルメットの中で女性の音声案内でエラーが発生したことを伝える。そして、ゲートが開くことはなかった。

「えっ…そんな…どうして…」

見たことないエラーと悶々としたやりきれない感覚だけが残り、悲鳴のような声を上げる。

全てが中途半端に終わり、目の前に立ちはだかる壁を前に茫然としてしまう。

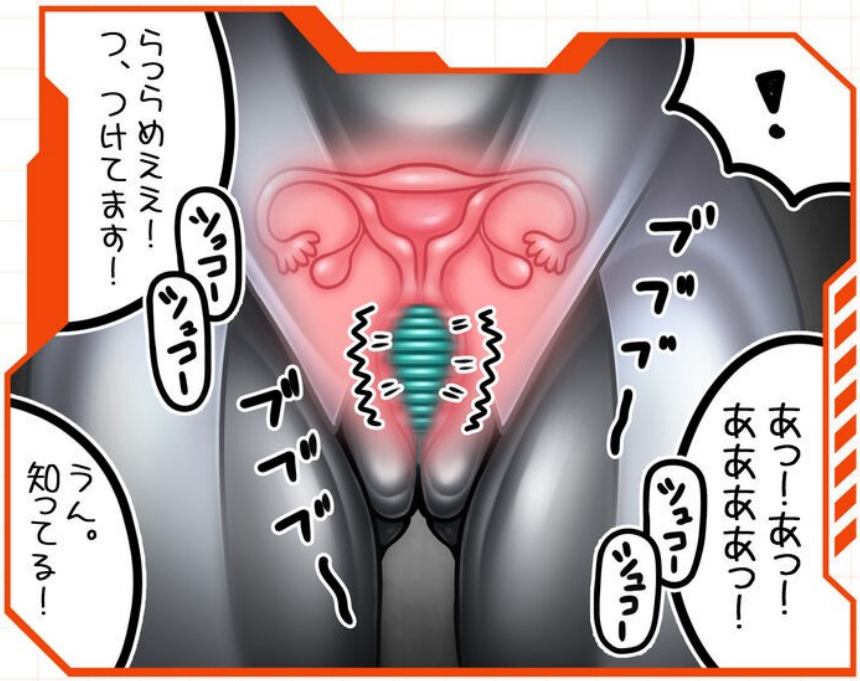
「あなた、そこでなにをしているの？」
「ひゃっ！」
ソフィアは突然背後から声をかけられて、驚きのあまりヘルメットの中でおかしな声を上げてしまう。スーツを装着していると、外の音が聞こえなくなるので、スーツの外側には音声を拾うマイクが装備されている。イヤホンでスーツの外の音を聞き取ることができるが、人の気配には気がつかなかった。
振り向くとそこには、制服の女性が立っていた。見たところソフィアと同じぐらいの年齢で、作戦指揮をするクラスの人物のようである。
「ああ…あなたね。さっきからここを行ったり来たりしていたの。私はエリザ。ここのリーダーよ。ここの通り方、知らない？」
「は、はい…」
「いいわ。わたしが教えてあげる。」
エリザという制服の女性は、スマートフォンのような小型の端末を取り出して、ソフィアの鼠蹊部にそれを当てる。
スーツの鼠蹊部に内蔵されているチップを読み取っただけのことだったが、突然、敏感になっている部分を弄られてビクっ！と体をふるえあがらせてしまう。
「ソフィア？ああ、今日からの子ね。無理もないわ。」
「はい。ソフィアと申します。よろしくお願いします」
「あんまり固くならないでいいわ。ここはＡＡのアクティベーションじゃないと通れないようになっているの。あなたのスーツはそれに対応しているはずなんだけど…ちょっと見せてもらえる？」
エリザは持っていた端末をソフィアのバックパックにケーブルで接続する。

この端末はリーダーなどの幹部のみが所持を許されている。端末をバックパックに接続することで、装着している人の全てデータ…脈拍や体温、呼吸数、トイレをした回数などのバイタルデータなどがわかる。
彼女は端末を片手に表示されているデータを全て確認する。
「もしかして、このスーツ着たの初めて？」
「は、はい。訓練では何度も着てますけど、自分専用のは初めてで…」
「そう。必要なデータが一部不足しているわね。ＡＡのデータが入ってないみたい。ま、いっか。いいわ。わたしの権限でここでデータを取っちゃいましょう♪」
「ＡＡってなんですか？」
「アクメ・アクティベーション。ここでこのままスーツの中で気持ち良くなってもらえればいいの。じゃ、始めるわね。」
「えっ…えっ…」
エリザはいたずらな笑みを浮かべながら、ヘルメットに密閉されているソフィアの顔をシールド越しに覗き込む。そして、黒いゴム質のスーツに包まれた胸を優しく愛撫する。ぷっくりと隆起した乳首をあえて避けて、焦らしながら円を描くように、優しく黒く光沢を帯びたツルツルの乳房を撫で回す。
エリザにスーツを撫でられるたびに、素肌を舌でじっとり舐められてるような気持ち良さと、グチャグチャという艶かしい水音が漏れて、ソフィアが先ほどまで求めていた興奮が蘇る。そして、呼吸を重ねるごとに、シュコーシュコーという呼吸音が荒ぶっていく。
「このスーツ…気持ちいいよね。わたしも着たことあるわ。オナニーしたくてたまらなくなっちゃうの。何度も何度もイッて脱ぎたくなくなっちゃう。そうでしょ？」
「（シュコー…）」

は、初めてのスーツ…すごく恥ずかしいのに…
ちーあっと見せてね！
ツコー
ツコー
はぁ…
はぁ…

ソフィアは気持ちよさと恥ずかしさで声を上げることができず、呼吸音で返事をするしかなかった。エリザはそのままソフィアの胸から下半身に手を伸ばし、内股をソフトタッチしてゆっくり攻め始める。スーツの外からもくっきり見えるほどの割れ目に直接触れることはせずに、内股からジワジワと股間に焦らすようにスーツの上から触れる。
するとソフィアの方から腰をクネクネと動かし始めて、自らそこに刺激を求め始めた。甘い刺激にヘルメットの中で目元が溶け始めている。
シュコーシュコーと荒い呼吸音とスーツのグチャグチャという粘液の音を漏らすことに躊躇しなくなった。程よく出来上がってきたとエリザは判断した。

「ソフィア、ここにアレは挿れたのかな？」
「あ、アレ…ですか…？（シュコー）」
エリザが端末を操作すると、ソフィアの膣内に挿入していた体液回収用のデバイスが振動し始める。
「ああっ！！！」
「ふふ…いい反応ね。」
「つ、着けてます…い、挿れました…はぁはぁ…（シュコーシュコー）」
「うん。知ってる。」
そして、またエリザは端末を操作する。



さっきよりも強く、よりソフィアのGスポットを刺激するように設定を変更した。
「あああああっ！！！（シュコーシュコー」
直接的な刺激にソフィアはお腹を押さえながらビクビク震える。スーツの黒い艶に包まれた身体が淫らに踊り始める。
「ふふふ。すごく気持ち良さそう。それじゃあなたがイクところのデータ取るから、いっぱい気持ちよくなってね。」
そういうとエリザは端末を操作した。

『アクメ・アクティベーションを開始します。この操作は装着者が完全絶頂するまで停止できません。』

ヘルメットの中で先程の女性のアナウンスが流れた後、スーツがまたバックパックによってバキュームされる。

ソフィアの体はエリザにいじられた後で、程よく感度が上がっていた。その状態で膣内に挿入しているデバイスがブーと鈍い音を立てて、バイブレーションする。彼女の快感の渦がまた揺さぶられる。

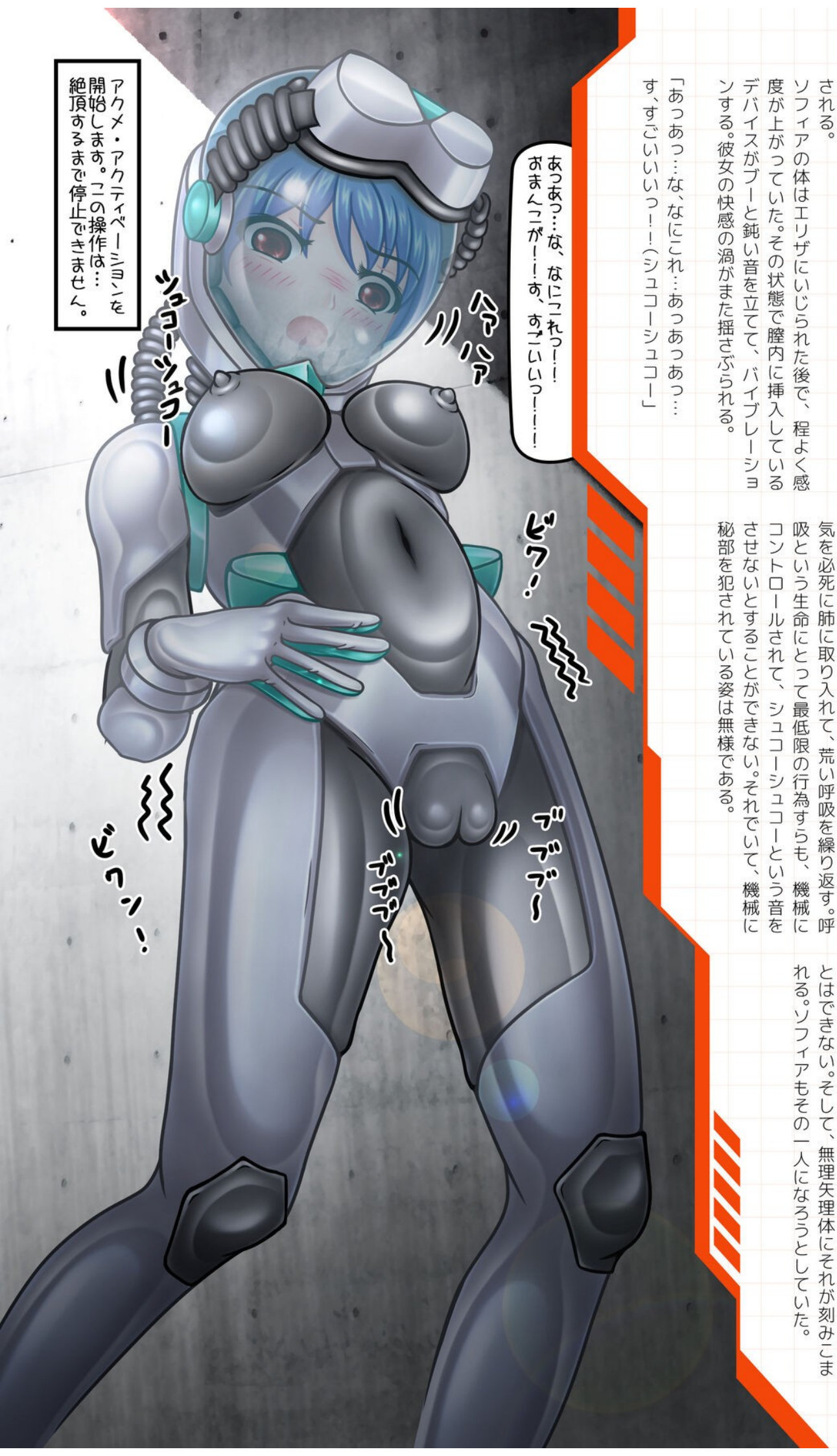
「あっあっ…な、なにこれ…あっあっあっ…す、すごいいいっ！！（シュコーシュコー」

ヘルメットの中でだらしない喘ぎ声を口から漏らしてしまう。そして、その声は電気信号となって、スーツの外のスピーカーから、薄っぺらい音になって出力される。

スーツに密閉され、バックパックから与えられる空気を必死に肺に取り入れて、荒い呼吸を繰り返す。呼吸という生命にとって最低限の行為すらも、機械にコントロールされて、シュコーシュコーという音をさせないとすることができない。それでいて、機械に秘部を犯されている姿は無様である。

そうとは知らずにこのスーツを装着する女の子たちは、皆これを受け入れてしまう。

それは普通にセックスや自慰をしているだけでは、知ることができない快感を知ってしまうことにある。スーツを装着したら最後、この快感から逃げることはできない。そして、無理矢理体にそれが刻みこまれる。ソフィアもその一人になろうとしていた。



『…フェイズ２を開始します。』
ヘルメットの中で女性の音声案内が流れて、次の段階に進んだことが示される。そう今までは前戯だったのだ。
ソフィアの下腹部がスーツによって程よく圧迫される。リズムよく圧迫したり緩んだり…圧迫したり緩んだり…を繰り返す。それはまるで肌の上から子宮そのものを鷲掴みするかのように、掴んだり離したりを繰り返す。
そして、それに反応するように、膣内に奥深く入り込んだバイブレータが内側から直接子宮を揺さぶる。
フェイズ２を開始します。
ハァハァ
シュコー
シュコー
はぁ…はぁ…らめええ…
おかしくなっちゃう…
きもちよしゃぎて…
なにもかんがえられない…
ビクビク
ギチィ
ブブブー
ブブブー

外側と内側から交互に攻められて、快感の波が作られる。スーツを装着している限り、その波から逃れることはできない。自慰をする時よりも何倍も強烈な快感に、ソフィアの体は力が入らなくなりその場に座り込んでしまう。
機械にされるがままに子宮を掴まれ、快感の渦に突き落とされる。腰やお尻をくねらせて、胸をプルンプルンとバウンドさせて、自分の意思とは関係なく、身体が勝手に操られているように動いてしまう。
それは湧き上がる快感に、身体が沸立つようなダンスに見える。黒いスーツに包まれた体が操り人形のようにビクビクと動き回り、淫らな光沢で全身を輝かせる。

「あああああっ…らめええっ!!おかしくなっちゃう!!やめて!!と、とめて!!こ、こわ…こわれちゃう!!」

体験したこともない強烈な快感に、ソフィアは半ばパニックになっていた。しかし、エリザは止めることをしなかった。むしろこの光景を楽しんでいる。

「ふふふ…そう。すごく気持ちいいわよね。みんなはじめての時はそうやってパニックになっちゃうの。でも、大丈夫。その気持ちいいことがやめられなくなっちゃうから。あなたがイクところ見ててあげるから安心して。さぁ気持ちよくいっちゃおう?!」

エリザは、スーツを装着した女の子が強烈な性的快感に溺れ、悶え、壊れていくところを眺めているのがたまらなく好きだった。
自分も過去に同じ経験をしているが、他の子がどういう反応をするか興味があった。そして、初めて体験する子が犯されて快楽に堕ちていく様が愛おしく、何よりも独り占めしたいひと時であることに気がついた。リーダーという立場にいるのも、この瞬間に立ち会うため、というのも過言ではない。

『絶頂の前兆を確認しました。完全絶頂まで10…9…8…』

音声案内が絶頂までのカウントダウンを開始する。

風船に空気を入れていくように、スーツに密閉されたソフィアの身体に快感が蓄積されていく。そして、風船が爆発する直前のように彼女の体は気持ちよさの限界が迫っている。背中のバックパックはそれを察知してカウントダウンを開始した。
一気に弾け飛ぶ爆弾のように、絶頂はすぐそこまで迫っている。

『7…6…』

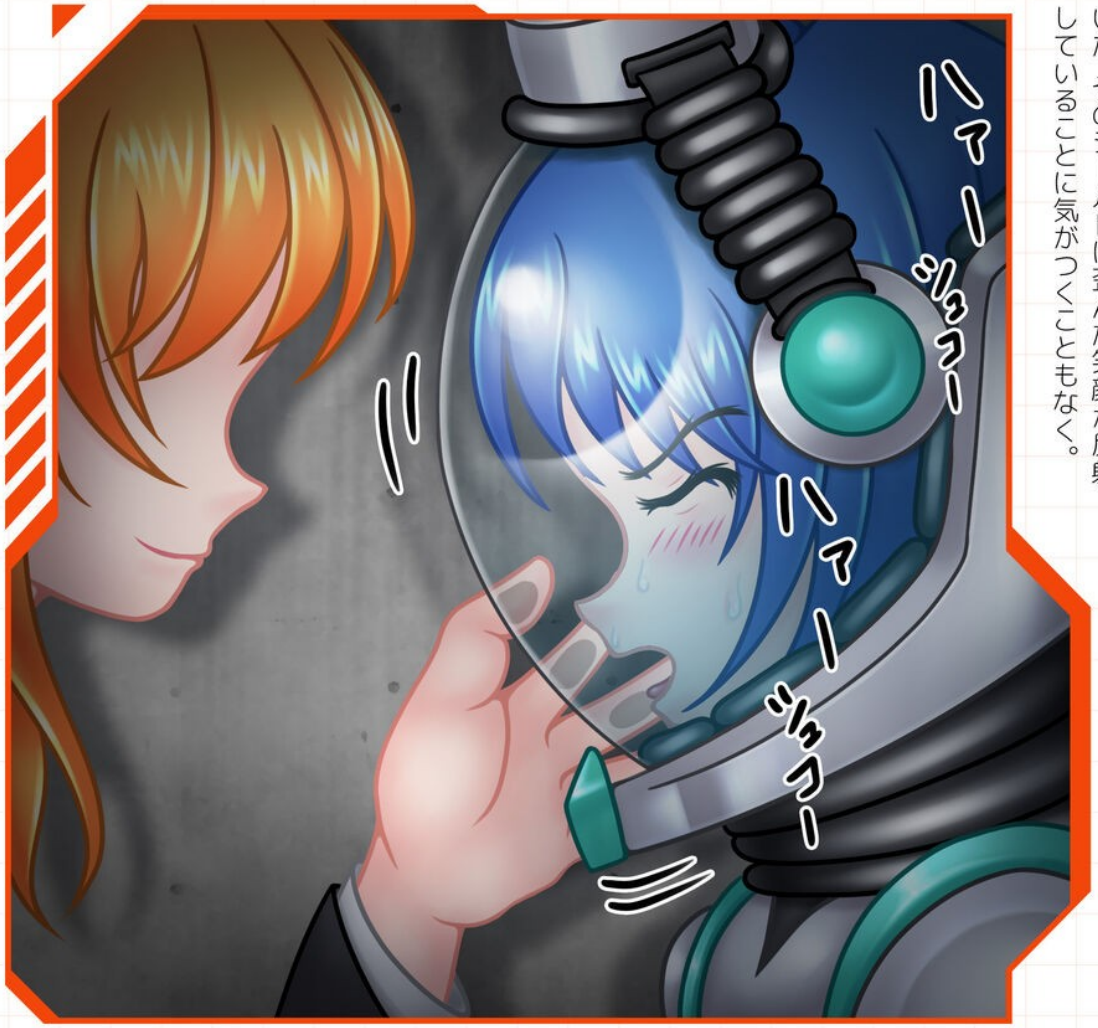
（シュコーシュコー）

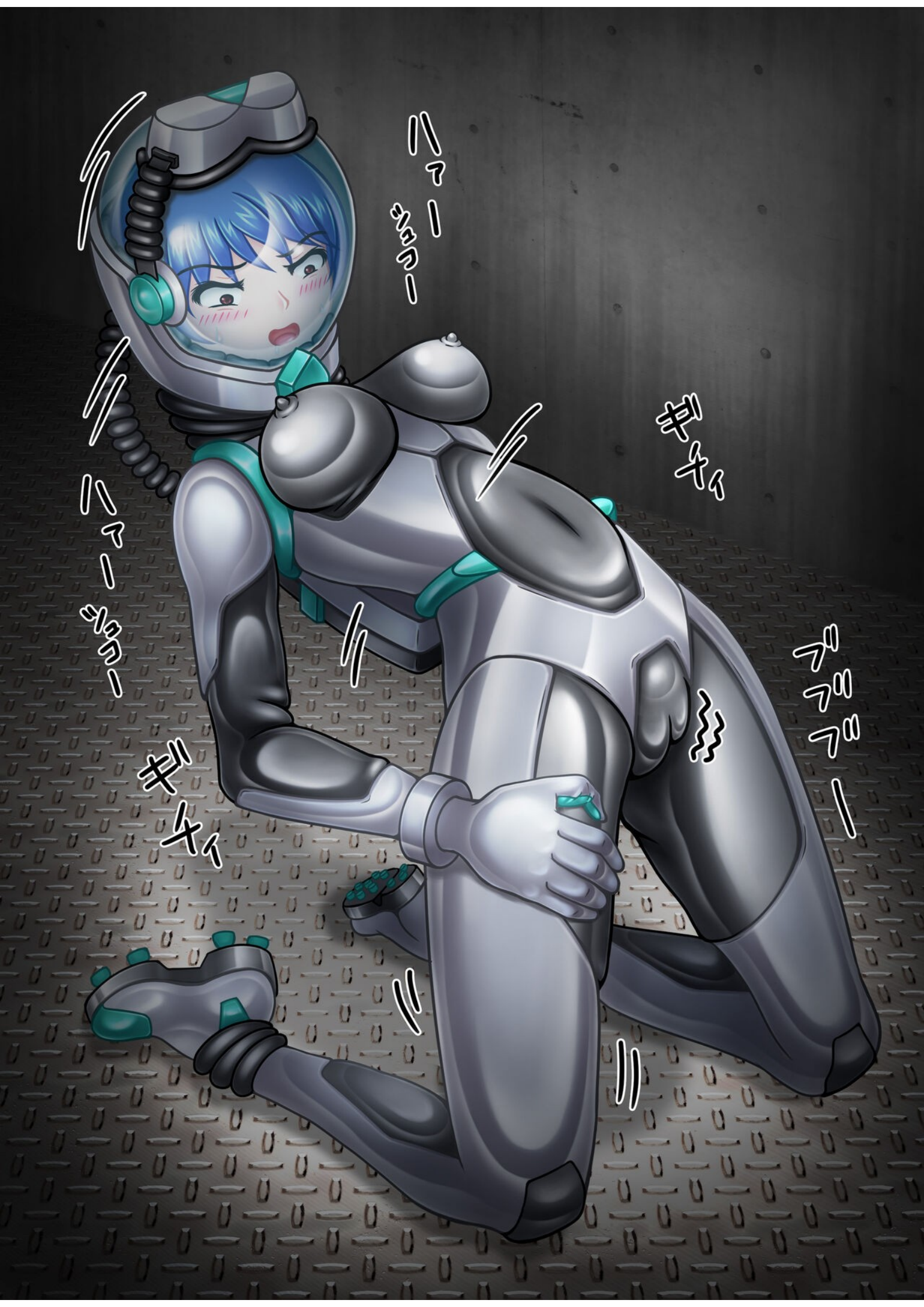
あまりの刺激に、ソフィアは呼吸すら満足にできずにいた。ヘルメットの外には沢山の空気があるのに、それに触れることすらできない。壊れた機械のように、シュコーシュコーと音を鳴らして呼吸するしかない惨めさ。背中の小さな機械に呼吸を制御されて、人としての色々な権利が奪われていく。貞操はもちろん、曇り始めたシールドが視界すらも奪おうとしている。

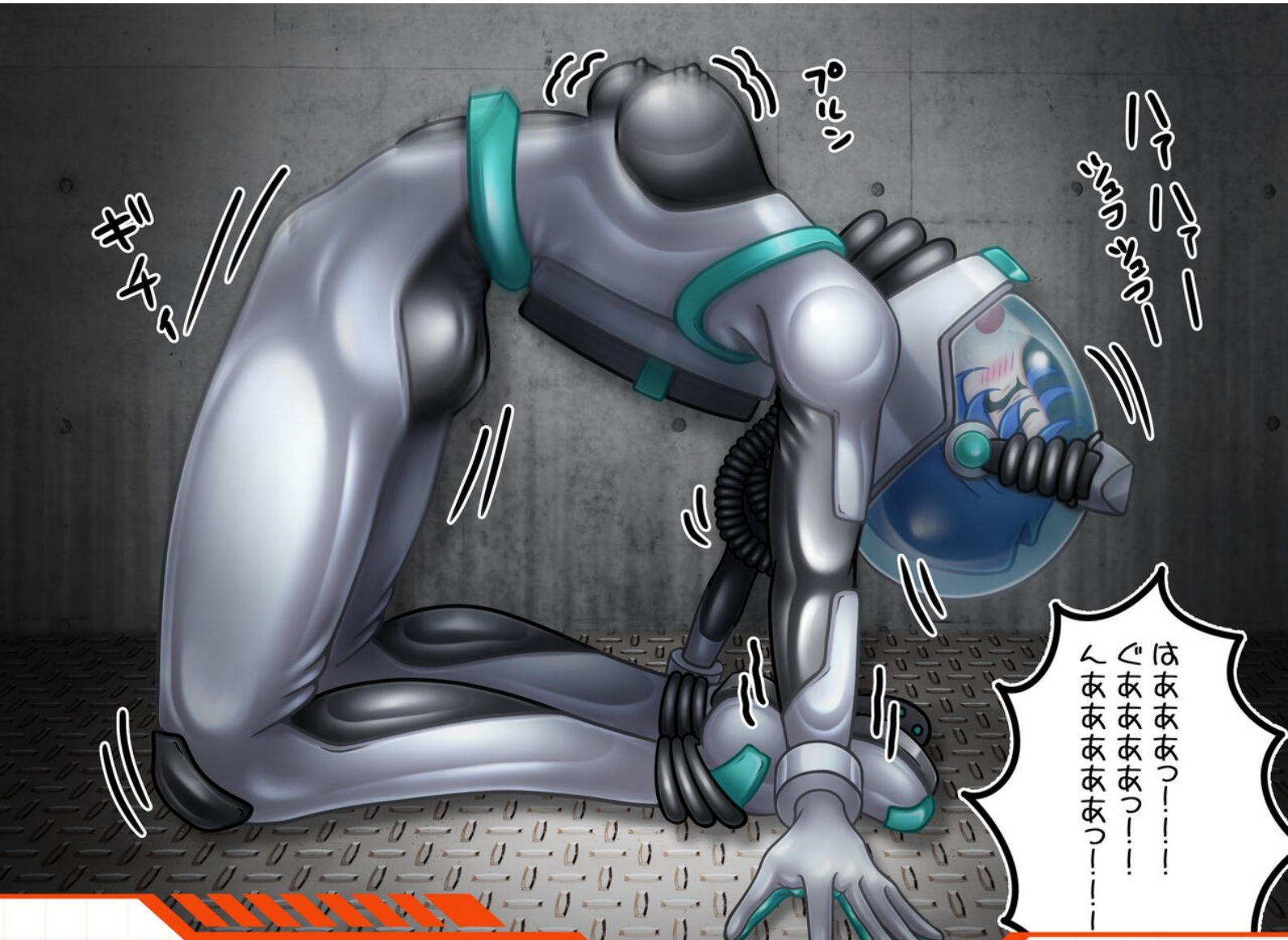
『5…4…』

（らめぇっ！らめぇっ！！らめぇ！！！）

少しでも楽になろうと肺に空気を取り入れようとするが、ヘルメットの中の媚薬ガスが噴射される。呼吸すらも快感を加速させるものに変えられ、また1つ人としての権利がなくなる。いや、恐らくスーツを装着した時からそんなものなかったのかもしれない。そんなソフィアの姿を、曇ったシールドの外からエリザは見つめていた。そのシールドに歪んだ笑顔が反射していることに気がつくこともなく。




ハァーハァー
ギャィ
ハァーハァー
ブブブー
ギャィ



『3…』

（きちゃうきちゃうきちゃうきちゃう）

先ほどの媚薬ガスのせいか、黒いスーツに包まれたソフィアの身体は感覚がピリピリと痺れて、自分の身体ではないかのように、勝手にピクピクと痙攣しだす。

吹き出してくる汗と股間から漏れている汁が、スーツの中に溜まって痙攣で震えるたびに、中でクチャクチャクチャクチャと卑猥な音を奏でる。スーツに密閉されたソフィアの身体は快感で、今にも破裂しそうになっていた。

『2…』

（いきたいいきたいいきたいいってらくになりたいいきたいいきたい！！！）

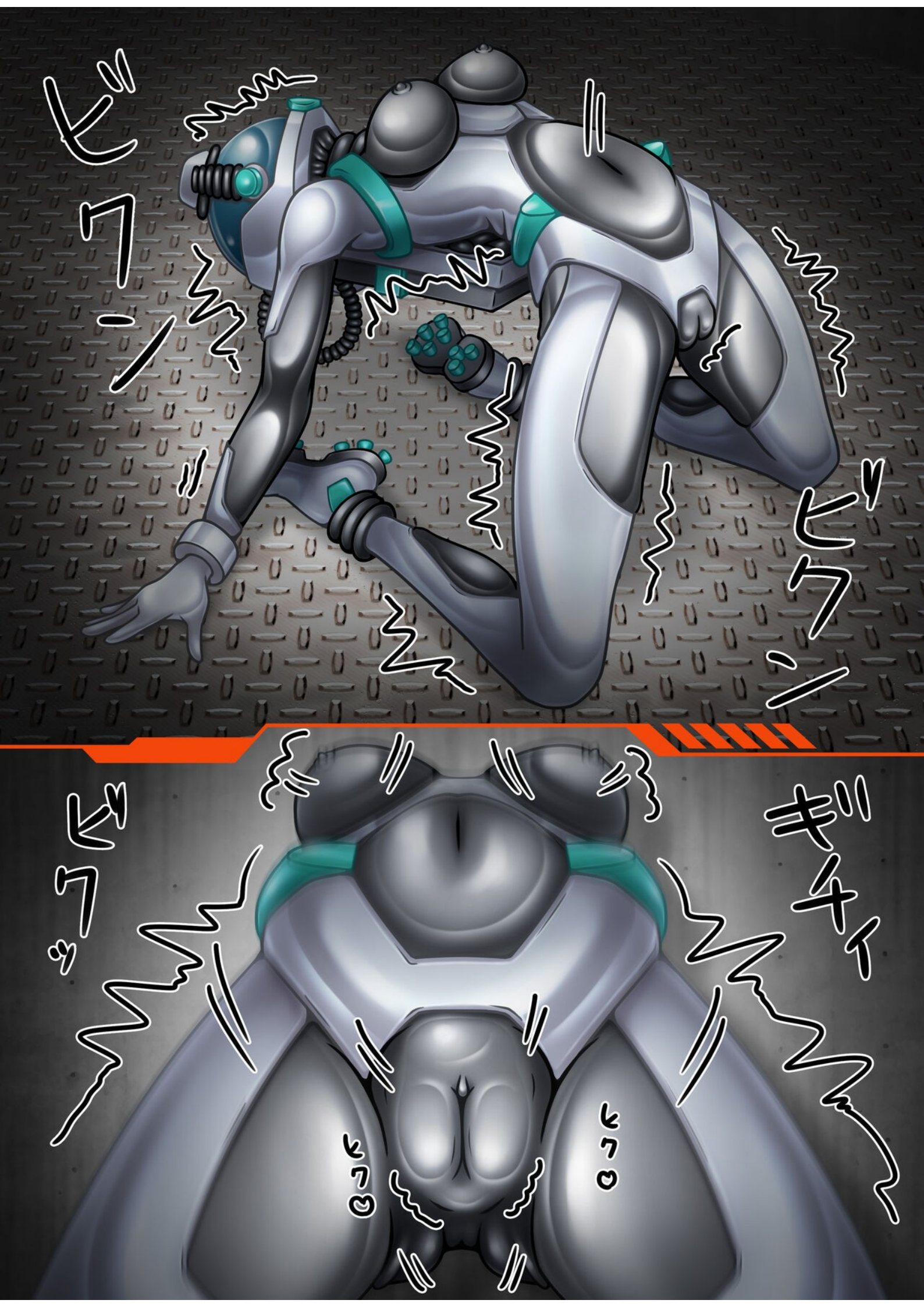
身体の感覚はすでに彼方に散ってしまっている。あるのは白く塗りつぶされかけている意識と、機械の操り人形に成り果てた黒いスーツに包まれた身体。もはやこの快楽地獄から解放されるのなら、意識もろとも全てを散らして楽になりたいと思ってしまう。

『1…』

バックパックがスーツをさらにバキュームする。そして、装着しているソフィアの身体を、海老反りしたような姿勢に形作っていく。スーツは装着者の姿勢すらもコントロールする。全身が性感帯にされた状態で、無理矢理身体を操られて、言葉にならない悲鳴が口から唾液と共に溢れ出る。

（はあああっ！！！ぐあああああっ！！んあああああっ！！！）

股間の割れ目と隆起したクリトリスが、くっきり分かるほどにまでバキュームされたスーツ。そこを突き出すかのようなポーズで、体が張り付けられる。それはまもなくスーツにすべて制圧され、強制的に絶頂させられる儀式の始まりを表していた。


ビクーン
ビクン
ビクビク
ギチィ
ヒクッ♡
ヒクッ♡

『O…』

（あああああああっ！！！！）

膣内に挿入していたデバイスが、今までにない激しさで振動してトドメを刺す。激しい物理的な振動と電撃による刺激が、ソフィアのGスポットに目一杯注がれる。まるで火に油を注ぐかのように、爆発的な快感でソフィアの身体を激しく揺さぶり壊していく。セックスや自慰で得られたような快感が小さなチリになってしまうほどの大きな快感で、破壊して、失くして、新たな感覚をその身体に上書きしていく。

そうこれは新たな感覚を開発するための儀式。スーツを初めて装着したら誰しもが通る洗礼なのだ。

スーツに包まれた身体は海老反りに、性器を突き出したポーズで固定される。あまりの快感でそれに逆らうことができず、淫らな快楽に呑まれるしかない状況に強制的に追い込まれるのだ。そして、人としての全ての権利を奪われ、無様な姿で絶頂し、陵辱されることで、スーツに屈服し、奴隷になることを示す儀式だった。

ソフィアは絶頂する瞬間、人として言葉を発する権利すらも奪われる。言葉にならない絶叫…もはや動物的な叫び声をヘルメットの中で発する。しかし、その声すらも電気信号に変えられ、スーツの外に装備されているスピーカーから薄っぺらく出力されるだけだった。

「ああ」ふぇいえあおいえおぇ！！！！

それから数日後…
ビクン
ジュワー
ブブブー
ビクン
ジュワー
ブブブー
ギィィ
ギィィ
コツ
ふふ…
みんな気持ちよさそう。
ふふふ…いいわ。
とてもいいわ！

「ふふふ…いいわ。とてもいいわ。」

エリザは目の前の光景を眺めてうっとりと悦に浸っていた。
スーツを装着した女の子たちが自らの前で、【服従のポーズ】をしていた。

端末を眺めながら、一人一人のバイタルをモニタする。全員が性的快感を感じており、絶頂するかしないかのギリギリのところを彷徨っている。

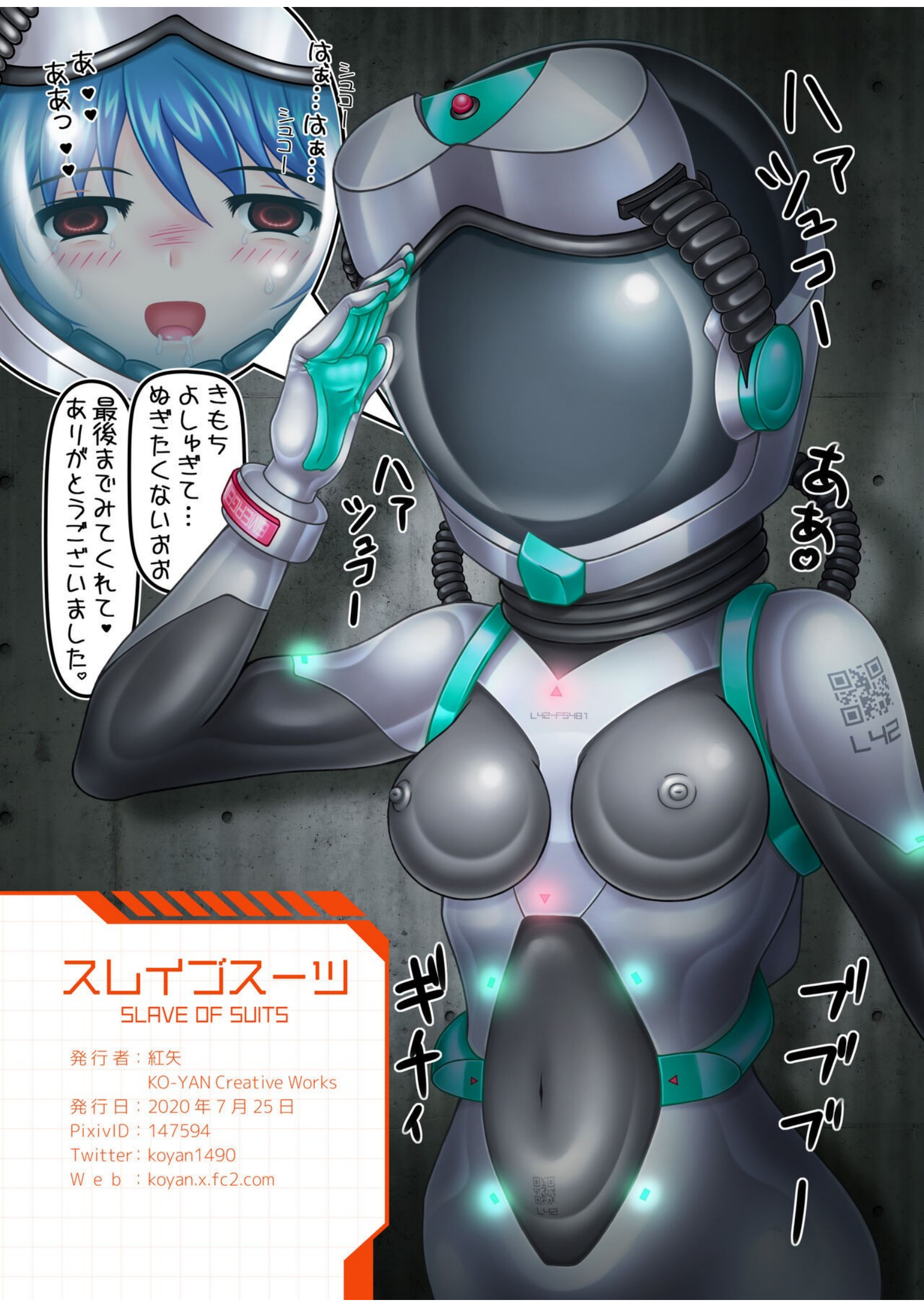
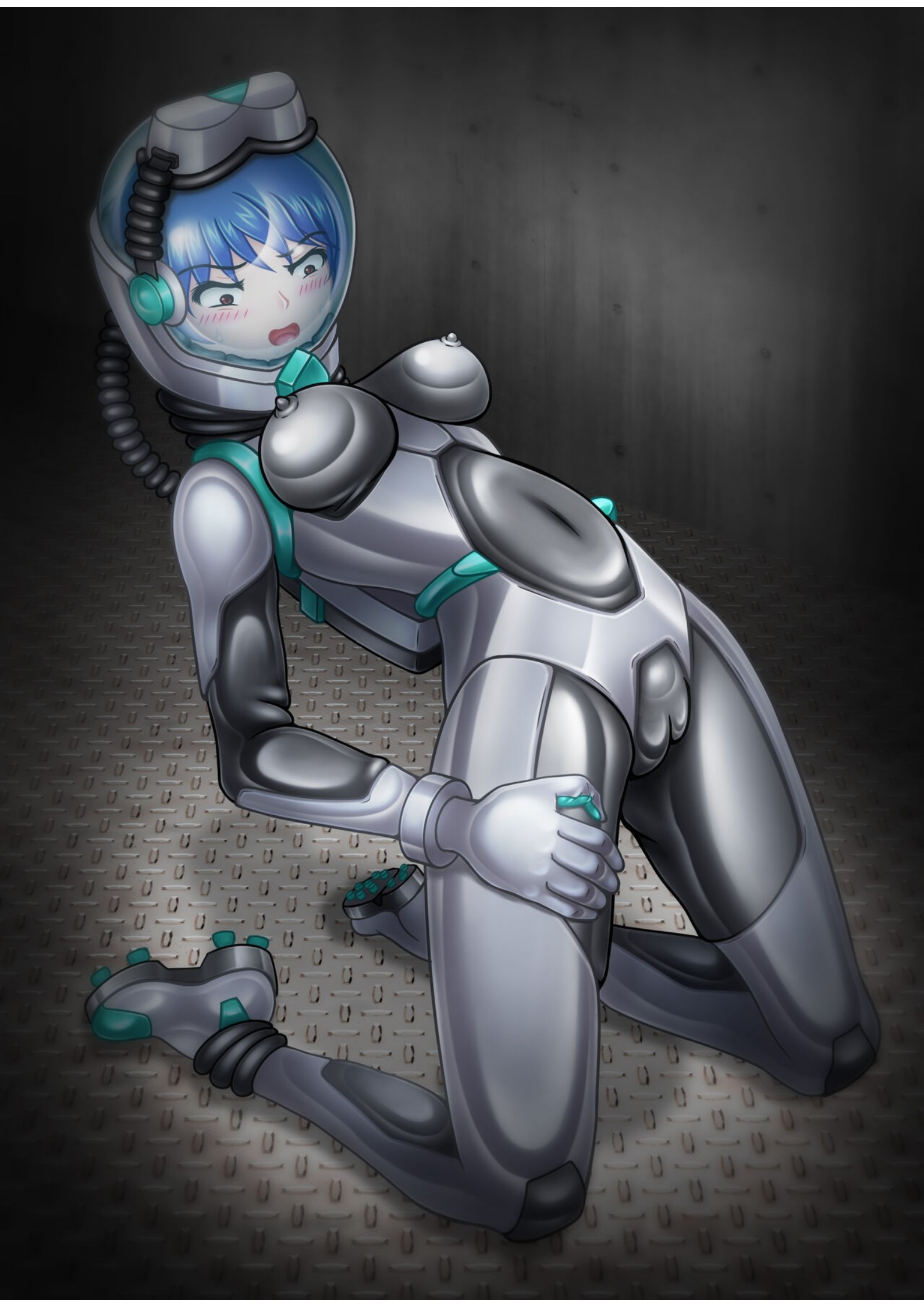
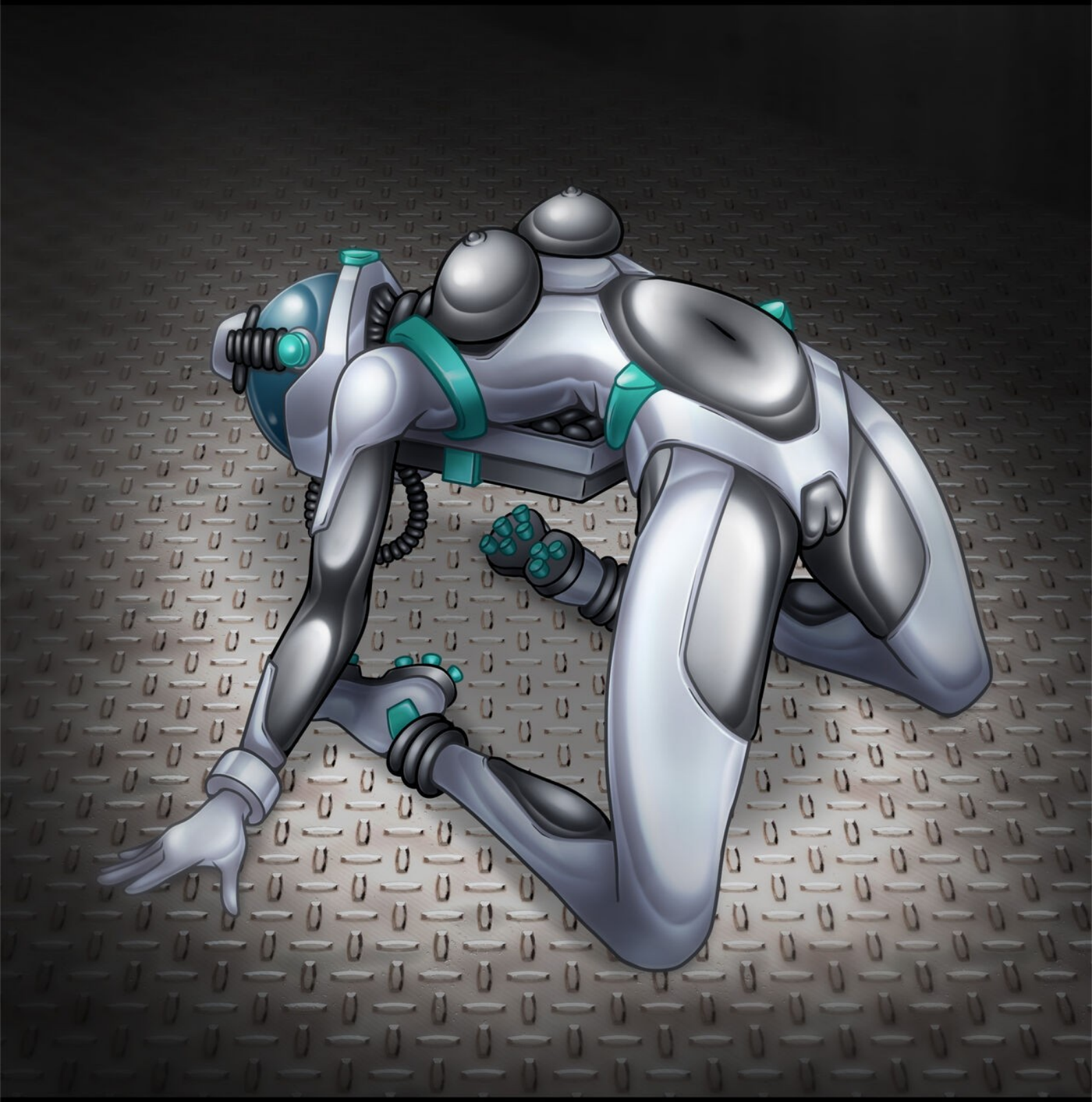
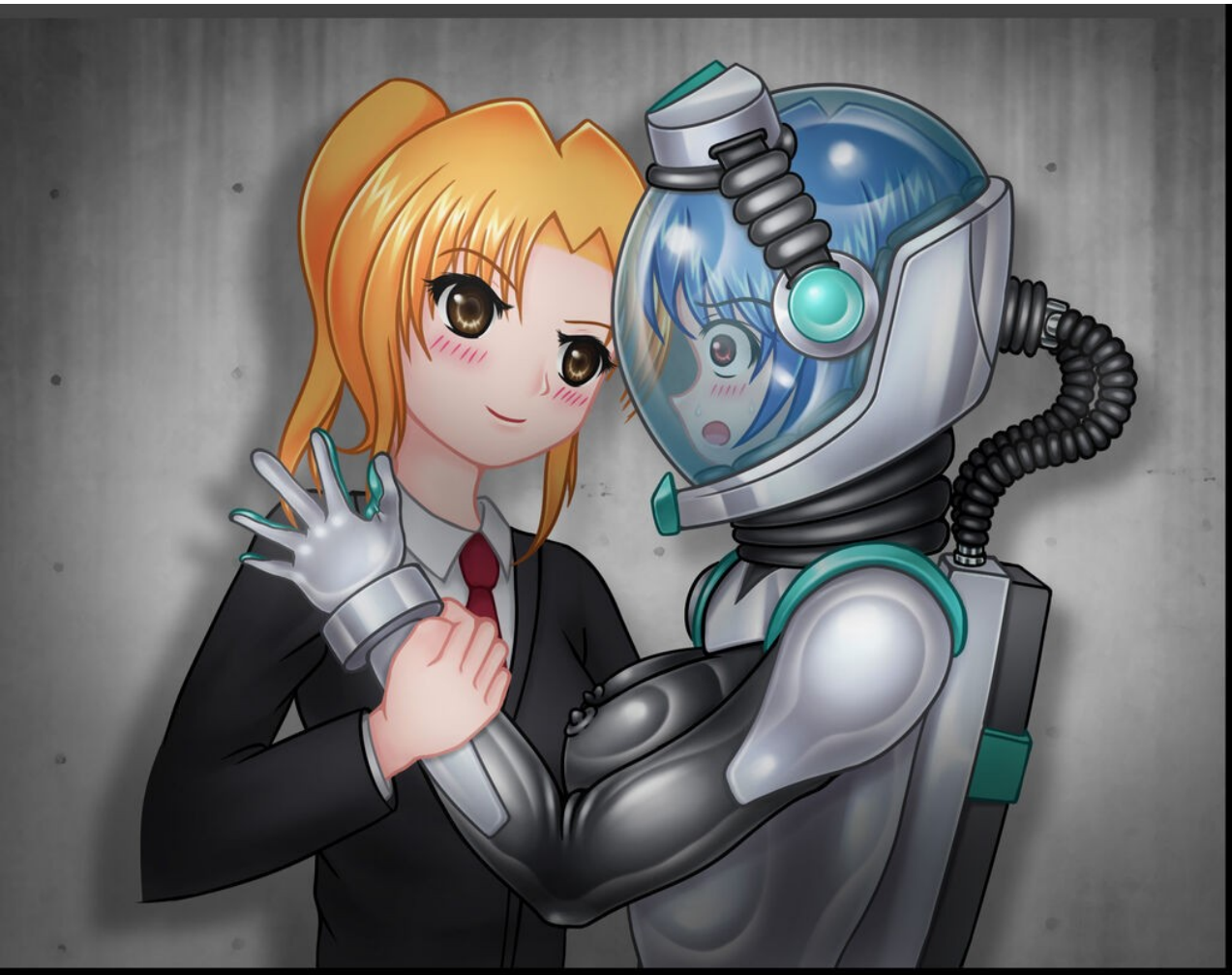
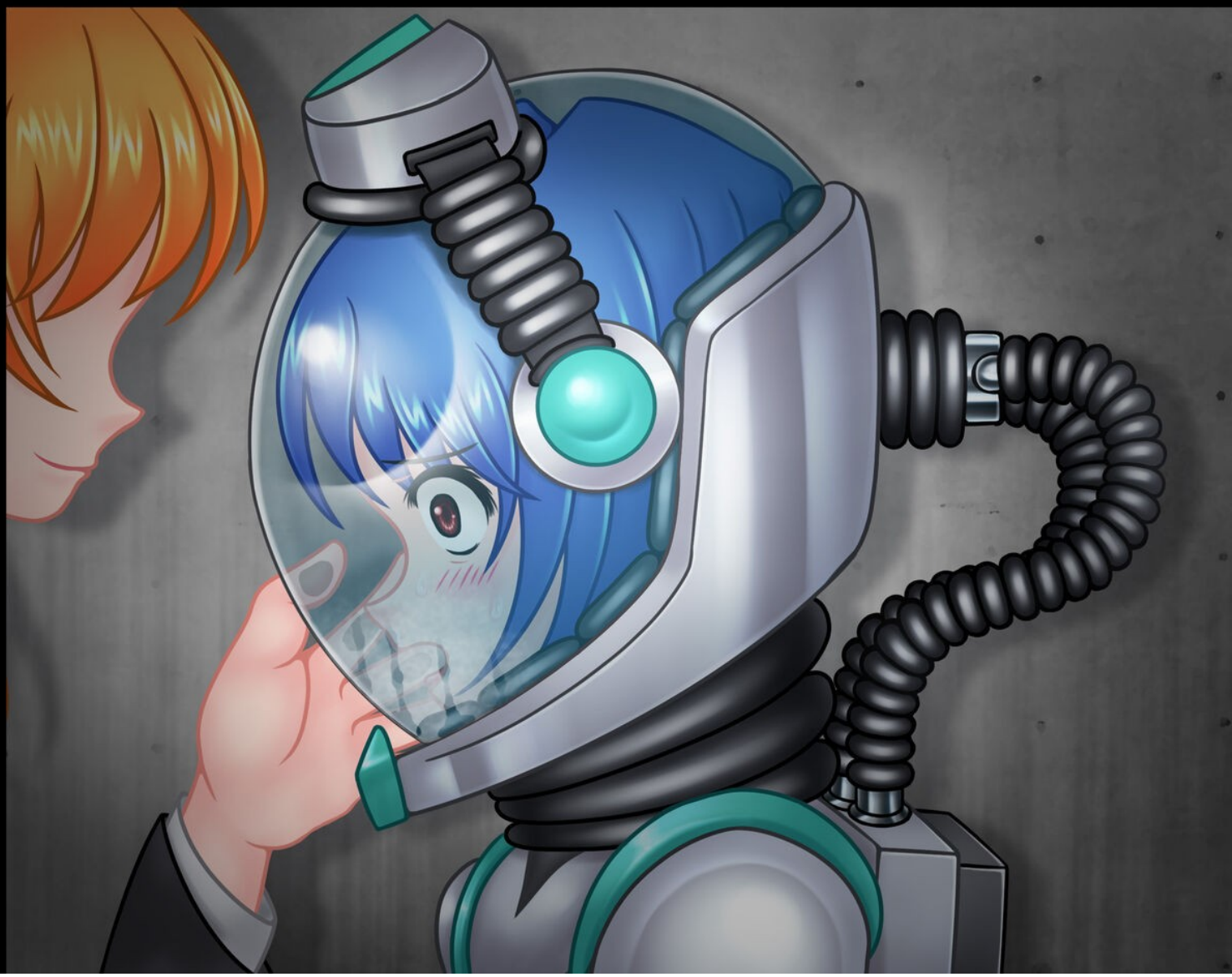
いや、そうするようにしていた。

持っている端末はスーツを装着している女の子を思うがままにできる。絶頂もボタンひとつ。

一人で自慰をする時よりも、異性に抱かれている時よりも、味わえない快楽。スーツを装着していればそんな快楽に浸ることができる。そして、そんな快楽を求めて彼女たちは自ら身体を差し出して、スーツが必要な過酷な環境の任務へと連れて行かれる。

これはそれを労う行為の一つ。そして、時々一人か二人をピックアップして「スペシャルプレイ」をするのが慣例となっていた。

「今日は…ソフィアにしようかな。」


ハァ ハァ ハァ
ハァ ハァ ハァ
ハァ ハァ ハァ